

Courrier de Séverac

セヴラック通信



第4号

2008
前期

日本セヴラック協会・会報

Société Déodat de Séverac - JAPON

日本セヴラック協会第10回例会
創立5周年記念コンサート

2008年5月18日(日)

《例会》14:00-16:30 日仏会館ホール

第1部

フルート六重奏

植村泰一 (1st Fl.)、日比野久美子 (2nd Fl. & Picc.)、五百川伸子 (3rd Fl.)、
西村 祐 (1st Alt. Fl.)、吉野 裕子 (2nd Alt. Fl.)、石川絵津子 (Bass Fl.)

セヴラック (編曲: 石川絵津子) 《休暇の日々から》第1集より

Déodat de Séverac: EN VACANCES 1er recueil

〈シューマンへの祈り〉

Invocation à Schumann

第1曲 〈お祖母様が撫でてくれる〉

I. Les caresses de Grand' Maman

第2曲 〈ちいさなお隣さんが訪ねてくる〉

II. Les petites voisines e visite

第3曲 〈教会のスイス人に扮装したしたトト〉

III. Toto déguisé en Suisse d'église

第4曲 〈ミミは侯爵婦人に扮装する〉

IV. Mimi se déguisé en "Marquise"

第5曲 〈公園でのロンド〉

V. Ronde dans le Parc

山田実紀子 (Vn)・深尾由美子 (Pf)

セヴラック: 《ミニヨネッタ》

Déodat de Séverac: Minyoneta (Souvenir de Figueras)

《セレの思い出》

Souvenir de Céret

《ロマンティックな歌》

Lied Romantique

鎌田直純 (Bar)・末吉保雄 (Pf)

セヴラック: 《フィリス》

Déodat de Séverac: Philis (Rondeau chant)

《終わりなき夜の唄》 エスピナス・モンジュネ 詩

Chanson de la nuit durable (Mme. Espinasse - Mongenet)

～休憩～

第2部

館野 泉・平原あゆみ (Pf)

セヴラック 《鉛の兵隊》

Déodat de Séverac ; Le soldat de plomb

平原あゆみ (Pf)

セヴラック 《ペパーミント・ジェット》

Déodat de Séverac ; Pipperment Get

館野 泉 (Pf)

カッチーニ (吉松隆 編曲) : 《アヴェ・マリア》 (《3つの聖歌》より)

Giulio Caccini ; Ave Maria

～休憩～

第3部 お話と演奏

「フランス、ラングドック地方の音楽」

～オクシタンのうた、カタルーニャのうた～

ジャン・ジャック・クバイネ (Bar), マリー・クバイネ (Mezzo Sop.)
Jean-Jacques Cubaynes Marie Cubaynes

末吉保雄 (Pf)、平原あゆみ (Pf)

【演奏予定の曲目】

セヴラック : 《梟たち》 シャルル・ボードレール 詩

Déodat de Séverac : Les Hiboux (Charles Baudelaire)

《ある夢》 エドガー・アラン・ポオ 詩

Un Reve (Edgar Allen Poe)

《オーバード》 マルグリット・ナヴァール 詩

Aubade (Marguerite Navarre)

《ノエルの歌》 グドゥリのラングドックの詩

Chant de Noël (Thème languedocien de Goudoulitrs (trs. Paul Grivollet)

《屋根は空の上に》 ポール・ヴェルレーヌ 詩

Deodat de Severac ; Le ciel est, par-dessus le toit, (Paul Verlaine)

《山の夜明け》 デオダ・ド・セヴラック 詩

Deodat de Severac ; À l'aube dans la Montaigne (Déodat de Séverac)

《雪の季節》 アンリ・ゴージェ 詩

Temps de neige (Henry Gauthier-Villars)

《子馬の歌》

Chanson pour le petit cheval (Prosper Estieu)

ファリャ : 《7つのスペインの歌》

Manuel de Falla y Matheu: Siete Canciones Populares Espanolas

《懇親会》 17:00 - 20:00 日仏会館レスパス

セヴラック通信
Courrier de Séverac

第4号
2008
前期

目次

曲目について ●深尾由美子	03
歌曲の歌詞 ●鎌田直純	07
〈連載〉セヴラックを伝えた日本語文献 その1 カルヴォコレシ著／大田黒元雄訳「近代音楽回想録」	013
〈連載〉セヴラックと私 ●重政隆	014
第8回例会の報告 ●亀田正俊	015
第9回例会プログラム	表2
編集後記	016

曲目について

文●深尾由美子

《休暇の日々より》第1集

——フルート六重奏（原曲：ピアノ・ソロ）

～お城で、そして公園で～ 中級程度の7つのロマンティックな小品集

En vacance（1911年）

〈シューマンへの祈り〉

- 1、お祖母様が撫でてくれる
- 2、ちいさなお隣さんが訪ねてくる
- 3、教会のスイス人に扮装したしたトト
- 4、ミミは侯爵婦人に扮装する
- 5、公園でのロンド

《休暇の日々より》第1集の各曲は、セヴラックの甥や姪、親しい友人の子供たちに捧げられている。誕生し、成長していく子供たちの“きらめき”に、優しいまなざしが注がれている。

〈お祖母様が撫でてくれる〉は、1905年5月18日サン・フェリックスに生まれた、セヴラックの姪に捧げられている。セヴラックは彼女の代父（洗礼の際の代理父：親戚の伯父が代父になることが多い）を務めた。お祖母様とは、デオダの母マダム・ジルベールのことであろうか。この夫人が優しく孫娘を愛撫する光景が目浮かぶような、やさしく気品ある響きが香る。

第2曲以降、セヴラックの館の開放された扉から、村の子供たちがやって来て、子供の謝肉祭が始まる。第3曲〈教会のスイス人に扮装したトト〉は、ガストン（ヴァイオリニストの旧友ルネ・ド・カステラの息子）に捧げられている。フランスで「トト」とは、いたずらっ子の男の子を指す。

ヴァトー、ヴェルレーヌ……フランスの18、19世紀の詩人や画家たちが、好んで音楽の舞台に選んできた野外でのピクニック、舟遊びや仮装……。 「たっぶりの遊び心」の精神はセヴラックにも見られる。シューマンが、子供時代の回想として《子供の情景》を書いたように、《休暇の日々より》は子供時代に思いを馳せた大人が、子供心や子供の世界で歓迎される。

《ミニョネッタ》～フィゲラスの思い出 Minyoneta（1919年）

——ヴァイオリンとピアノ

「ブランシュがああのように、サルダーナを踊りだしそうなのが目に浮かぶよ……」

1911年6月11日、セヴラックはブランシュ・セルヴァにこう書き送った。

彼は、カタルーニャの踊りであるサルダーナを、作品中に少なからず取り入れているが、この踊りのことを「高貴で、造形美に溢れ、アテネ風」と特筆している。

副題のフィゲラスはバルセロナから北へ2時間ほど行ったカタルーニャの街の名前で、ダリ美術館があることで有名だ。セヴラックは1907年に師のシャルル・ボルドとここを訪れた。

曲は3部形式。鋭いシンコペーションと3連符の支配的なキャラクターの提示部の後、中間部は、軽やかでためらいがちな歌ではじまり、魅惑的でいくぶん強迫じみたリズムと突き刺すようなアチャカトゥーラが彩る。呪文のようなメロディとびしっと決まった3連符はスペイン的で、舞踏と旋回の恍惚が感じられる。曲の最後は、懇願するように3連符のリズムを繰り返して、踊りが終わり、楽器が鳴り止み、おぼろげな記憶が消沈して、夢のなかに消えていく。

「ミニョネッタ」とは「かわいらしい」という意味合いを持つ。規模はかわいらしく短いけれども、変化に富んだ場面が凝縮された魅力的な曲だ。スペイン的なリズムや旋律で、土地の魅力や深く秘められた性質をじかに表現している。

セレの思い出 Souvenir de Céret

——ヴァイオリンとピアノ

メランコリックな《ミニョネッタ》とは対照的に、陽気で熱狂的で、幸福感の溢れるこの曲は、カタルーニャのテーマで作曲されている。感情の吐露を避けるかのようなセヴラックにおいてははずらしい。1919年～1920年に作曲され1931年に Rouart et Lerolle から出版された。

3部形式で、出だしのト長調の部分は、甲高い音色のフルート、フラビオール、派手でリズムミカルなタンボリールが鮮やかに躍動的に鳴り響き、くるくると回り連続性のある舞踏的陶酔をおびたテーマが激情的に提示される。続くホ短調の部分はしなやかで、これも踊りの要素であろう、いくぶん悲劇的である。中間部は讃美歌なのかその地方に伝わる歌なのか。モンポウの歌と踊りのある部分が思い起こされる。《セルダーニャ》の第3曲〈村のヴァイオリン弾きと落穂ひろいの女たち〉のように動と静、踊りと祈りが組み合わされている。再現部を経て、発展をとげていく長めのコーダへとつながり、踊りは疾走するかのように消えていく。

セレの街はサルダーナのメッカであり、この曲は踊りの賞賛である。

ロマンティックな歌 Lied Romantique

——チェロまたはヴァイオリンとピアノ

ピアノとチェロまたはヴァイオリンのために作曲されたが、セヴラックによるピアノ・パートが散逸してしまったために、ヴァイオリニストのルネ・ド・カステラが再編して1929年に出版された。

美しい旋律を溢れるばかりに生みだすセヴラックは、即興の名手であった。しかし「天から降りたインスピレーション」は、その多くが書きとめられずにピレネーの空の彼方に戻っていつってしまった。

この曲の旧友ルネ・ド・カステラの手によるピアノ・パートは、やさしくとろけるよう

な和声使いで、デオダの靈感を譜面に呼び戻してくれているような気がする。ジャンケレビチの言葉を借りて言うならば「鳴り響くピアノ、ピアノッシモ」の世界がある。舟歌のようなスタイルの、ノスタルジックでつつましやかな叙情性をそなえた曲だ。

ルネ・ド・カステラはセヴラックをはじめスコラ・カントルムの作曲家の作品が出版された音楽院出版部 (Edition Rouart et Lerolle) に後年かかわっていた。

ペパーミント・ジェット Pippermint Get

—ピアノ・ソロ

この陽気で華やかなコンサート用ワルツは、楽譜には「友人ゴッドシパへ」と記されているが、オーギュスト・ジェットへのオマージュでもある (ちなみにゴッドシパは、シプリアン・ゴドゥブスキーの愛称で、彼の兄弟はオペラ《風車の心》の歌手だった)。

オーギュスト・ジェットは、ルヴェル (Revel) というサン＝フェリックス・ロラゲより 10 キロほど東へ行った大きな町のリキュール製造者である。ジェット家 (Get) は、兄ジャン (ルヴェルの市長で名士) と義理の弟ピエールの代で、1796 年から続くフランスでも指折りのお酒の蒸留所を相続し、「ペパーミント・ジェット」というリキュールを考案した。その名のとおりミントのお酒なのだが、英語の peppermint の綴り e を i に間違えたままお酒のラベルを作ってしまったという。このミントフレーバーのリキュールは、山の氷を砕いたようなさわやかな味が人気を博し、フランスでナンバーワンになりロングセラーとなった。このお酒の瓶をポール・セザンヌが描いた作品がワシントンの美術館に残っている。

そのジェット家のオーギュスト・ジェットとセヴラックが知り合ったのは 1907 年の 7 月のこと。地方政治にかかわっていたセヴラックは、地区議会選挙に、ベジエの葡萄栽培者らが選出されたクレモンソー党派に対抗して出馬した。ここでオーギュストに紹介され、ともに、当選を果たしている。立候補にあたって彼は、「僕は、すべての者のための地方分権者」と宣言したという。

《ペパーミント・ジェット》はサティの《ジュ・トゥ・ヴ》にも通じるエスプリを感じさせる曲だ。一杯飲んで陽気な気分になって踊っているような場面、誇らしげなスペイン風のメロディが、ここカタルーニャの土地を映し出している。ピアノ版の他に、作曲家による 2 つのオーケストラ版がある。

鉛の兵隊 本当のお話からの 3 つの挿話 Le soldat de plomb

—ピアノ・ソロ

第 1 曲：とだえたセレナード

第 2 曲：箱の中 4 日間 (囚われの身-悲しみの 4 日間)

第 3 曲：結婚式の行列。

1904 年 10 月末の書簡によると、このときすでに連弾用の《鉛の兵隊》の構想が出来上がっていたようで、《ラングドック地方で》の創作時期と重なっている。スコラ・カントルムの 22 人の作曲家による『子供のためのアルバム (小さな子供や、子供時代を懐か

しむ大人のための)』の中に、アルベニスの《イヴォンヌの訪問》、ブランシュ・セルヴァの《アルバムのパージ》などとともに収められ、1905年に出版された。画家モリス・ドゥニ(1870-1943)の描いた美しい表紙絵には、ダンディやセルヴァ、セヴラック他、作曲家たちのポートレートが描かれていることを、セヴラックは興奮して姉に手紙で報告している。また友人のルネ・ド・カステラには「“愉しみ”のための曲集を書いたよ!」と書き送った。

各曲の冒頭には、作曲家自身の短いストーリーが書き込まれており、ドビュッシーのバレエ音楽《おもちゃ箱》はじめ、ラヴェルの《マ・メール・ロワ》、《子供と魔法》などとも合い通じるものがある。

彼のピアノでの交響詩とも言える壮大な組曲《ラングドック地方で》に対して、《鉛の兵隊》は、遊びの精神、ユーモアを含んでいる。1905年5月25日、スコア・カントルム音楽院で開催されたセヴラック作品だけのコンサートの第1回目に、セルヴァと彼女の12歳の弟子により演奏された。

歌曲の歌詞

編●鎌田直純

フィリス

Phylis

あなたの微笑みに魅せられた愛の神は
プシケーを無視してあなたに矢を放ち、
あなたの魅力の前にバッカスは、
アリアンヌの誘惑を物ともしない。

彼らは大胆にも虫のいい目論見を主張した。
あなたのために、優しい心を取り戻し、
わざわざ杯と矢をあなたに捧げようと。

あなたの微笑みに魅せられた愛の神は
プシケーを無視してあなたに矢を放ち、
あなたの魅力の前にバッカスは、
アリアンヌの誘惑を物ともしない。

この二つの勝利によって、
貴女の魅力は証された。

しかしフィリスよ、
あなたは私を信じて、
二人の恋人よりも、
あなたをはるかに愛している者をお選び下さい！
おお、フィリスよ！

あなたの微笑みに魅せられた愛の神は
プシケーを無視してあなたに矢を放ち、
あなたの魅力の前にバッカスは、
アリアンヌの誘惑を物ともしない。

(鎌田直純訳)

終わりなき夜の唄

Chanson de la nuit durable

おお、私の可愛い光の王女よ。
おいで、夜の道を私と一緒に、
大きく広がる満天の星の夜空のもと！

果てしなき道を辿り歩こう。
まどろむようなはかない昼顔でできた靴を
あなたは柔らかい足に履いて。

あなたは両手を僕にゆだね、
頭を私の肩にもたせかけるだろう。

時が眠り、人生を終えた幸福な者のように、
祝福されたさびれた城壁の中、
大きな柳の木の下を
安らかに私たちは歩む。

私たちを前に
時よ絶えてくれ！

時はもう存在せず
ただあるのは
あなたに届ける熱い愛のみ！

私はあなたを一人で連れて行こう。
時代を、年を、日を越え、
確かな永遠の道を辿って！

(鎌田直純訳)

ふくろう
梟

Les Hiboux

くろばいちい このしたやみ
黒葉水松の木下闇に
並んでとまる梟は
昔の神をいきうつし、
あかめ
赤眼むきだし思案顔。

たい
體も崩さず、ぢつとして、
なにを思ひに暮れがたの
傾く日脚推しこかす
おおまがとき
大凶時となりにけり。

梟のふりみて達人は
道の悟りや聞くらむ、
世に忌々しきは煩惱と。

しきそうかい
色相界の妄執に
しよにん
諸人のつねの苦しみは
きよ やすん
居に安ぜぬあだ心。

(上田敏訳)

降誕祭の歌

Chant de Noël

ああ、救い主がお生まれになった村で
私たちは祝福はできなかった。
しかし心をつくして、いつものように
わたしたちのこの厩を訪ねよう。

しっかり！皆、もっと優しい歌を
歌えるように準備して。
そう、陽気な羊飼いの少年たち、
祝祭で、魂を祝福しましょう。
我が父神、聖母よ、そしてえもいわれぬ幼子よ。

質素な馬小屋の奥の
貧しいまぐさおけの中に
光の後光さす美しい幼子が見える。
同時に、息子と神を愛する
素晴らしい聖処女も。

善良な村人よ、耳をすませよ。
あなたたちの近くにいる羊飼いたちを
呼び覚ます音楽を。
祝え、すべてを、鳥笛の音で踊るこの奇跡よ。

神の御名は光を放ち、
栄光は天国のように、
大地の上に遠く花盛るよ！
その恩寵によって、イエス様は
敬虔な心で聖なる平和を与えてくださるよ！

(鎌田直純訳)

朝の歌

Aubade

ここだよ、君のジャンは、おおマルガレーテ！
恋する心は悩ましさでいっぱい、
君に早く会おうと、ねえ、あそこ、水車小屋
のすぐそばにいるよ、
ここだよ、君のジャンは、おおマルガレーテ！

ここだよ、君のジャンは、
優しさでいっぱいの君のジャンだよ！
希望に満ち溢れた、ただ一つの宝よ、
君の愛撫をもらえるなら、
誠意と真心を君に捧げるよ！
ここだよ、君のジャンは、
優しさでいっぱいの君のジャンだよ！

空はもう曙は白んでいる。
太陽は昇ったばかり。
さあ、起きて、かわいい子、
もう時間はないよ、夢見る時間は！
空はもう曙で白んでいる。

ざわめく魅惑的なせせらぎを聞いてよ・・・
木の上で鳴く鳥を聞いてよ。
僕の声聞いてよ、おおマルガレーテよ、
早く、早く駆けておいで、
そして僕に話しておくれ
ざわめく魅惑的なせせらぎを聞いてよ・・・

(鎌田直純訳)

夢

Un Rêve

暗い夜の幻影に
私は過ぎ去った喜びを夢見た。
しかし、喜びと光ですっかり目覚めた夢が
壊れた心を癒しはしない。

ああ、過ぎ去った昔を照らす光で、
周囲にあるものに
眼差しを向ける人にとって、
夢は昼間であるということにはなるまいか？

世の全てが私を咎める時
この聖なる夢、この聖なる夢が
孤独な魂を導いて、輝かしい陽の光のように、
私を楽しくさせてくれた。

そうだ、夜と雷雨の中で、
その光が遠くに震えてはいても、
真実の昼の天体のもとで、
何があつても光よりも輝くことができたろう。

(鎌田直純訳)

空は屋根の上に

... Le ciel est, par-dessus le toit...

空は屋根の上にこんなにも青く、静か。
木々は屋根の上に枝葉を揺らせている。

空に見える鐘は静かに鳴り、
枝の上の一羽の鳥が
嘆きの歌を歌っている。

ああ、ああ、暮らしは彼方に、
素朴に、そして静かにある。
穏やかなざわめきは
街の方から聞こえてくるのだ。

一体どうしたのだ、絶え間なく涙するおまえ、
言ってみろ、どうしたのだ、おまえの青春は？

(鎌田直純訳)

山の夜明け

A l'aube dans la montagne

暗褐色、アイリスの暗褐色
赤褐色、エメラルド色ともいえない赤褐色の
空に沿って、
金粉とオパールで刺繍された
紗の後光に取り巻かれ
一つずつ山の頂が目覚める。

そよ風によって忘れさられた薄い雲が、
ヒースの野で陶然とした愛撫で
ゆったりとしている。
リラの花で斑点になった百合のヴェールの中
の谷間は
月の皮肉な眼差しに向かって
果てしなく溶けてゆくポプラの木々の
まわりを漂っているかのよう。

まどろみに浸された平原の方に
一瞬たなびいて舞い上がる炎の閃光のなかで
少しずつ地平線がはっきりしてくる。
そして赤く染まった頂から、
ルビー色の流れは岩に沿って落ちていく。

ツグミたちは雑木林の中で、
陽気なこだまに向かって鳴く。
そしてたなびくヴェールはアイリスの粉塵、
垣の金銀の細工の中に裂けて溶ける。

喜びのざわめきが勝ち誇ったように、
集落や村々から起こり
神々しい太陽が現れるのだ！

(鎌田直純訳)

雪の季節

Temps de neige

おお、甘き時、
私たちは寒々としたサロンにただ二人でいた。
えもいわれぬ瞬間よ！
蒼白の陽の光はおまえの眼をより青くし、
愛するあまり、おまえの髪が
金色に素晴らしく輝いて見えた。

私たちは、色あせたステンドグラス越しに
大通りに沿って舞い落ちる雪片を見ていた。
まるで、湖の上の蝶か、
老いた枝に咲く百合のように。

私の指は、おまえの指に触れようとせず、
唇は、おまえのの唇にかすかに触れた。
すると魔法が！
おまえの顔と手が白く冷たくなった。
雪のように。

(鎌田直純訳)

小さな馬の唄

Chanson pour le petit cheval

僕の大事な小さな馬よ、速く行け！
僕は不安に苛まれている。
柏の林の下で僕を待つかわいい子を愛してい
る。
もしずいぶん遅れたなら、修道院に戻ってし
まうだろう。

小さな馬よ、倦むことなく、ずっと激しく！
そんな稲妻、溝も跳び越せ、
水溜まりも跳び越せ！
口からは泡を吹き、岩壁に火花を散らせよ！
僕を想い続ける人に会わせておくれ！

小さな馬よ、おまえに美味しい馬草を約束し
よう！
さあ、急げ！さあ、急げ！
谷の奥には藁葺きの家だ。
遅れは彼女を死なせてしまう！

小さな馬よ、門までは行くな！
弔鐘が遠くから僕の耳に鳴り響く！
弔鐘から逃げ去るために引き返そう！
僕のあの子は！あの子は！
あの子は死んだのだ！

(鎌田直純訳)

ファリャ Manuel de Falla

《7つのスペインの歌》

7 Canciones populares espanolas

ムーア人の織物

大意 店に置いた上質の布地にしがみついた。
もう値打ちがおちたから仕方がない。安く売
られる・・・

ムルシア地方のセギディーリャ

大意 不実なお前は人手から人手にわたる銅
貨にもたとえようか。しまいには文字もきえ、
偽金と思われ、誰も相手にはしてくれない。

アストゥーリアナ（スペイン北部）の歌

大意 もしも慰めてくれるかと緑の末に寄り
かかれば、松は緑の松ゆえにわたしの泣くの
をみて泣いた。

ホタ（アラゴンの踊り）

大意 俺たち二人は好きあっちゃいない。と
皆が言う。二人の話しているところを誰もみ
てはいないからね、だが、一度きいてみりゃ
いいんだ、お前の心と俺の心に・・・

ナナ（アンダルシアの子守唄）

大意 おやすみ坊や。わたしの魂、夜明けの
かわいいお星さま

カンシオン（歌）

大意 お前の眼はうそつき。土の中へ埋めて
やろう。その眼をながめる身のつらさなんて、
お前にはわからないんだ。

ポロ（フラメンコの踊り）

大意 胸にひめたこの悲しみ。これは誰にも
言いはしない。呪われろ。恋よ、呪われろ。
わたしにそれを教えた人も！

セヴラックを伝えた日本語文献

その1

私たちのセヴラックが日本でどのように紹介されてきたか、文献から探る試みの連載です。第1回は、大正～昭和期に活躍した音楽評論家の大田黒元雄（1893-1979）が翻訳した、カルヴォコレシ「近代音楽回想録」（第一書房）です。大田黒は、まだ西洋音楽の情報に乏しかった日本に、ドビュッシーやシェーンベルクなどの同時代の音楽を紹介し、大きな影響を与えました。1938年刊行の本書も翌年第2版が発行されて、よく読まれたと思われます。

カルヴォコレシ（M. D. Calvocoressi, 1877-1944）はフランスの音楽評論家で、「アパッシユ」の名乗る、若き音楽家グループの一員。ラヴェルが組織したこのグループには、ドビュッシー、ヴィニエス、セヴラックらが加わっていました。旧友による文章を、当時の日本の読者はどのように受け止めたのでしょうか。セヴラック（セヴェラック）の章を引用しましょう。

デオダ・ド・セヴェラック

デオダ・ド・セヴェラックはルッセルと同じくダンディの弟子であつた。そして矢張り彼と同じく、スコラ・カントオルムのサアクルでと同様に我々のサアクルでも、人並びに作曲家として皆に愛好された。彼はその往くところどこへでも逞ましい単純さと快活さとの快い雰囲気をもたらした。彼は自分の生れた南國を愛し、その出来るだけ短時日しか滞在しようとしなかつたパリには恐らく十分に馴染めなかつた。彼は我々のサアクルの中で既に他界した唯一の人である。一九二一年に四十八歳で彼の長逝したのを聞いた時、私は深い悲しみを感じた。

彼の最初の特色ある作品、ピアノ組曲の「大地の歌」及び「ラングドックにて」は深い且つまつたく特別な感銘を産み出した。それらが生氣に溢れ、陽光に輝きながら大地からそのまま飛び出したことと、それらの曲のうちにある示唆と表現との品質が全然セヴェラック独自のもので、他の如何なる作曲家の音楽における如何なるものとも全然異なるものであることを人は感じた。そこで多大の歎賞と、彼の未來に對する猶も多大ですらある確信とが惹き起こされた。當時及びその後彼の音楽が克ち得た非常な称讃が他の國々の幾人かの評論家に過度であるやうに思はれてゐることを私は発見する。これはすくなくとも一部分は彼の出版された作品が割合にすくないことによつて説明され得よう。彼が紙の上に書く勞を執らなかつたり、その原稿を紛失してしまつたり、一部分だけしか作曲しなかつたり、實行をしらずに計畫したり夢想したりしたものがどれほど澤山あつたかは信じ難いほどである。（たとへば彼が大して上手にではなくピアノで我々に聴かしてくれた美しい「ゴオガンの死に寄する哀歌」を私は記憶してゐる。）それからまた彼の作品には、特にベジェの野外劇場での上演のために作曲されて、意図された條件の下で實際に上演されるのを聴かない限りは正當にその価値を判定し難い抒情悲劇「エリオガバル」や「大地の娘」のやうなものがある。

ともすれば彼の完成した作品だけでなく、そのスケッチや計畫まで知つてみた我々は、時として彼を称讃しながら未來を期待するやうに傾き、そして最早期待すべき未來のなかつた時に彼の記憶によつて影響を及ぼされた。しかも要するに私は我々の判断が大して誤つてみたとは考えない。セヴェラックはああも雄辯な詩人であり、その單純な生一本な雄辯においてああも悉く彼自身であり、またその獨創においてああも微妙で生粹であるから、その決して多くない所産の小部分だけが生き残るにしたところで、その部分はたしかに高い位置を占めることを續けることであらう。



セヴラックと私

重政 隆

小さい頃、組み立てた真空管アンプから流れてきた響きから、クラシック音楽にのめり込み、最近では、音楽家が住んだり活動した場所に行き、街の建物、風や空気、文化、人々などを訪ねる旅を楽しみにしている。

2000年4月、スペイン・バルセロナの北にあるテラッサという町で開催された国際会議の後に、音楽家カザルスを訪ねる旅をした。今思うと、この旅からセヴラックにつながったような気がする。カザルスが生まれ、育ち、住んだ、広い意味のカタロニアの町、ベンドレル、サンサルバドル、そしてプラド音楽祭で有名なフランスのプラドを訪れた。鐘の響きわたる街並み、ロマネスク教会（当時、ロマネスクとは知らなかった）の素朴な素晴らしさ、畑の様子、カタロニアを大事にする人々などをこの時知った。

館野泉先生より、2001年か2002年の2月ごろに、セヴラック協会設立の話をお聞きした。セヴラックの音楽を聴かせてもらい、今までと違う響きに魅せられて入会した。例会でセヴラックの音楽を聴くにつれて、またロマネスクの教会や鐘の話などを通じて、2000年4月の旅行で受けた印象に重なるものを感じた。

昨年（2007年）、セヴラック音楽祭ツアーの紹介があり、南フランスへまた行ける良い機会と判断し、参加した。ツアーより先に現地入りし、最初にセヴラックが、晩年を過ごしたセレの町を訪れた。強い光、さわやかで気持ちの良い空気と木々、はためくカタロニア旗。セヴラックが住みたくなった気持ちが分かるような気がした。続いて、ひまわりのなだらかな起伏に囲まれたサン＝フェリックス・ロラゲで、セヴラックの家を訪問。カトリーヌさん（セヴラックの孫のご婦人）達から、セヴラックの心を大事にする思いが伝わってきた。ぶどう酒工場の倉庫で開催されたセヴラック音楽祭は、周囲の自然と調和する気持ちの良い音楽祭で、主宰のクバイネ氏の、風土を大事にしたセヴラックへの思いが伝わってきた。ツアーでは、末吉先生のお陰で、町のレストランでカスレなど現地の料理も堪能することができ、音楽と旅の組み合わせに、食という新しい楽しみを教えて頂いた。

音の流れ、情報量の変化に人の気持ちや文化や風土まで感じる音楽、音楽家の表現力の凄さを感じ、さらに訪れてみて感じる空気感や文化をセヴラック協会を通じてたくさん頂いたように思う。今後とも楽しみにしたい。そして、4年前より習い始めたチェロで何とかセヴラックの唯一のチェロの曲《ロマンティックな歌》を弾けるようになりたいものである。

第9回例会の報告

亀田正俊

第9回例会は2007年11月18日午後4時からエナスタジオで開催された。前回同様会場は満席。会をここまで育ててくれたこの空間も、そろそろ手狭になってきた。

プログラムは、7月に行われた「セヴラック音楽祭の旅」の報告から始まった。最初にNHK BS-Hiが制作・放映したドキュメンタリー「ひまわり」の映像を見る。館野泉先生とセヴラックやセヴラックの生地との関わりを追った映像は、人と人のつながり、人と土地とのつながりについて、考えさせてくれる。ひまわり畑の映像が見事。

続いて、ツアーで写真撮影をしてくださった松本智勇さんによる美しいスライドである。生家の風景や貴重な写真資料が次々と紹介され、旅の記憶を蘇らせる。旅行中、通訳を一手に引き受けてくださった末吉保雄先生が、セヴラックの家族や彼の弾いたオルガンなどについて解説。彼の音楽がこの土地からどのように生まれたか、イメージできた参加者も多かったことだろう。

後半の演奏の部は、すっかり恒例となったフルート・アンサンブルから。石川絵津子さんによるフルート六重奏の編曲は、この日は《休暇の日々から》第1集より〈公園でのロンド〉。晴れやかな明るい響きに、彼がフランスの作曲家であることを改めて感じた。ここまで聴くと、《休暇の日々》全曲の編曲が待ち遠しい。

続く《ミニョネッタ》と《セレの思い出》は、ヴァイオリンとピアノのための知られざる作品で、楽譜は宮山幸久さんの提供だ。日本初演だった可能性が高い。今度は2曲ともカタルーニャ色が強く、《ミニョネッタ》は「サルダーナ」である。山田実紀子さんと深尾由美子さんによる熱い演奏で、例会はすっかり祝祭気分となった。

3番目は、鎌田直純さんのバリトン独唱と末吉保雄先生のピアノ伴奏で、〈王たちの日のために〉〈美しいダフニス〉、《セシリア》、《オーバード》の4曲が披露された。例会で毎回のように演奏をお願いしてきたが、サラベール社の「セヴラック歌曲集」を、ほとんどを歌い終えた、という。作品の奥深い響きに、吸い寄せられるような魅力を感じる。

休憩の後は、初登場の宮本ミサさんによる《日向で水浴びをする女たち》。色彩豊かで鮮やかなピアノリズムで、歌曲や室内楽とも違うセヴラックの世界が見事に展開された。名曲であることをつくづく思う。

最後は館野泉先生による、吉松隆作曲《アイノラ抒情曲集》である。館野先生の演奏は、東京育ちの吉松さんの音楽が、自然を強く指向していることを明らかにしたと思う。セヴラックと異なる国の異なる時代の音楽が、例会を「大地」の雰囲気ですくすく統一し、締めくくった。

編集後記

◆昨年、「セヴラック音楽祭」で大変お世話になったジャン・ジャック・クバイネさんが来日。折良く、日本セヴラック協会が創立5周年を迎え、例会もちょうど第10回を数えます。そこで、特別例会として、「創立5周年記念コンサート」を開催することになりました。晴れの会を大いに盛り上げたいものです。

今回の会報は、曲目解説や歌詞の対訳を載せ、プログラムとしての性格を強くしました。文章を執筆してくださった深尾さん、鎌田さん、ありがとうございました。また宮山幸久さんがセヴラックについて書かれた日本語の文献を提供してくれました。今号から少しずつ紹介していこうと思います。

協会を創立し第1回の例会を開催したのは、2003年5月25日、場所は代々木のアトリエ・ムジカでした。館野泉先生のご尽力でセヴラックのCDや楽譜が発売されたとはいえ、2003年当時セヴラックは今以上に無名の作曲家でした。インターネットでセヴラックの名前を検索しても、20件ほどしかヒットせず、そのほとんどが館野先生のCDと楽譜だったように記憶しています。なあまり知られていない作曲家の協会に、どれだけ参加者が集まるか、大変不安に思ったものですが、無事に船出して早5年、いつのまにか会員も50名を越えました。

このあいだに、日本の音楽界では、セヴラックを演奏する人がずいぶん増えました。コンクールの課題曲にまでなり、CDもずいぶん入手しやすくなりました。この変化に日本セヴラック協会の存在が貢献しているとすれば、じつに喜ばしいことです。

セヴラックの音楽や人柄、南仏やラングドックの文化と食物、そしてもっと広くは音楽と人と土地との関わりについて、語り合い、共に考えていく場として、この協会が未永く続くことを願っています。

セヴラック通信 第4号 2008 前期 日本セヴラック協会 会報

2008年5月18日発行

発行： 日本セヴラック協会

<http://www.geocities.jp/severacjp/index.html>

E-Mail: severac_japon@yahoo.co.jp

名誉会長◎カトリーヌ・ブラック・ベレール

顧問◎館野泉、濱田滋郎、末吉保雄、小沼純一

事務局◎伊東美香、亀田正俊、窪田葉子、松田純子

編集： 亀田正俊、窪田葉子、山根京子

事務局： 松田純子◎〒247-0013 横浜市栄区上郷町 262-32-5-204 TEL & FAX: 045-895-2317

連絡先： 亀田正俊◎ TEL&FAX: 042-502-7227 / E-Mail: kameyan@jcom.home.ne.jp

印刷・製本： フェデックス・キンコース・ジャパン



日本セヴラック協会
Société Déodat de Séverac - Japon